コルネリオ会
（キリスト者自衛隊員の会）

ニュースレター　No.74　付録
1995年2月

’94ＡＭＣＦ世界大会特集

AMCF世界大会に参加して

矢田部稔

１９９４年１０月６日から１０日までの５日間、米国ヴァージニア州ヴァージニア・ビーチで開催されたＡＭＣＦ世界大会について報告したい。

参加９２ヵ国の地域別国数は、次のとおりであった。アジア：１３、アフリカ：２８、ヨーロッパ：２２、北・中米：１４、南米：１０、オセアニア：５。総参加者数は、日本からの６名を含み１，０４７名であった。今大会の大きな特色は、ロシアをはじめ多数の旧共産主義諸国が、参加したことであった。

ヴァージニア・ビーチは、ワシントンから国内便で１時間、更に車で小１時間の距離にある。広大な敷地と大きな収容能力を持つ研修センター「ファウンダーズ・イン」であるが、宿泊用として更に他３ホテルを増加使用した。

主題は、フィリピ書第１章３～６節から「福音宣教のパートナー」であり、ビル・ワードロップ師（退役空軍中佐、１０年間のグレース福音教会牧師の後、現在は「宣教における教会前進委員会」主事）による５日間連続のフィリピ書講義が行われた。

開会式は、米国国歌で始まり、アルゼンチン歌手（退役一等軍曹）の「あなたはなんと素晴らしい方」の独唱と参加各国国旗の入場があった。世界会長ニュー（英国）退役少将から、「この大会の目的は、単に会合を懐かしみ喜ぶことではなく、軍隊社会の中に福音をいかにして広めるかを考え求めることです」との挨拶があり、また、この大会のために作詩作曲された「福音宣教のパートナー」が披露された。

次の日から、ほぼ同じ日課が続いた。日課の第１は、祈祷会である。

大集会場を使用する英語による祈祷会の他、各言語の祈祷会が小集会場で行われた。我々日本人は英語の大祈祷会に１度出席し、他は日本語祈祷会を持った。そのうち１回は韓国の李弼燮将軍夫妻等を招き日韓合同祈祷会を持った。

日課の第２は、朝食である。千余名はホテルに隣接して特設されたテント食堂で食事をする。ある日の朝食は、東アジアが特別出演を担当するときであり、韓国、台湾に続き私達日本人が讃美歌３１０番を合唱した。

日課の第３は、聖書講義である。内容については主題のところで既に述べた。大集会場では、英語は、全て６言語（日・韓・中・露・仏・スペイン）に同時通訳された。日本語通訳のために数名の在米日本人ボランチアの奉仕があった。プログラムの中に、多くの音楽が準備されており、有名な歌手ダニー・バイラム氏の独唱やスカートを履いた英国楽隊の演奏などがあった。

日課の第４は、コーヒータイムであり、日課の第５は、昼食である。コーヒータイムと食事が個人的な交わりの時である。食堂のテーブルは１０名の丸テーブルであり、自由に着席した各国代表者によって話の花が咲く。

１４年前の英国大会で、私達にホームステイを提供してくれた夫妻に再会し、私の証に続いて日本のため祈りを捧げてくれた英国婦人にも再会した。コーヒータイムでは、ギターを持ち出し廊下にはみ出して、ゴスペルソングを始めるグループもある。特にスペイン系が上手である。

日課の第６は、３回連続の、次に列記する８個のゼミである。①祈りにおけるパートナー、②信仰成長におけるパートナー、③軍隊宣教におけるパートナー、④家族生活におけるパートナー、⑤小グループ聖書研究会におけるパートナー、⑥敵対的環境で生き宣教することにおけるパートナー、⑦軍隊生活におけるパートナー、⑧若い人の将来を考えるパートナー。

私達夫妻は、予め「④家族生活におけるパートナー」のパネラーとして指名されており、今井夫妻は「⑧若い人の将来を考えるパートナー」のパネラーであった。

家族ゼミの司会者は米国人夫妻であり、パネラーは司会者とは別の米国人夫妻、ロシア人夫妻、エクアドル人（夫人の参加はなし）、と私達夫妻であった。

このゼミは、婦人が多い。同時通訳の装置はなく、肉声通訳者の周りに着席する方法がとられた。従ってゼミ会場は一見騒然とした感じで

あったが、多いときに約百名の参加者が家族生活の諸問題を話し合うことができた。聖書における個人・配偶者・家族・教会・社会に関する基本的な考えの説明に続き、各自の具体的な問題を持ち出し話し合った。内容的には、子育ての問題や単身赴任に伴う問題が多かった。各回とも聖書のみ言葉で締めくくられた。人間生活が実際的にみ言葉の智恵によって支えられているとの実感を深くした。

日課の第７は、夕食である。食事については日課の第２で述べたが、各地域毎の出し物のほか、ある日の夕食では功労者に対する感謝表彰式もあった。

日課の第８は、夕食に続く時間であるが、ある日は各地域の集会であり、私達は東アジア地域集会に出席し、日本代表として私が１９９５年の東アジア大会を中心に報告をした。

日課の第９は、休憩と自由な交わり又は小グループの交わりの時である。朝７時から夜１０時頃までのスケジュールは、相当強行軍であった。

日課の第１０は、日本勤務の経験がある海兵隊グリナルド退役少将の証であった。

日課の第１１は、記念写真の撮影である。隣接の放送局ＣＢＮの石段玄関に千余名が並びカメラマンをクレーンで空中高く揚げての撮影であった。民族衣装や軍服の正装姿は色とりどりであった。

日課の第１２は、小グループ聖書研究会である。リーダーの居室で１０名が話し会った。私達のグループには、ロシア空軍士官学校の哲学教官がおり、彼に対する質問が集中した。

日課の第１３は、日曜日に行われた聖餐式である。空軍チャプレン・リチャードソン中佐により、また大会参加中の約３０名のチャプレンの補佐により行われた。カソリックの聖餐式が別室で行われた。

日課の第１４は、観光である。徒歩で放送局ＣＢＮ見学に行くグループ、車でノフォーク海軍基地やウイリアムズバーグ等に行くグループ等があった。

日課の第１５は、世界会長及び各地域会長の任命式である。世界会長達は既に何年か前に就任し活動をしているが、就任後初めての世界大会において、この式が行われた。前ホイートン大学長のハドソン・アーメルディング博士がヨハネ福音書第２１章に従って、「私を愛するか」と問いかけ、会長が「はい。愛します」と答える問答が３回繰り返された。

最後に、１９９５年の日本におけるアジア大会が期待されているこ

とについて述べたい。各プログラムで日本が紹介されるときは、その都度、日本はアジア大会と連接して紹介され、多くの参加者から大きな励ましを受けた。

日本代表団
写真右から
今市宗雄兄
石川信隆兄
今井健次兄
今井倫子姉
矢田部和子姉
矢田部稔兄
大川哲史兄
（日本語通訳）
大川夫人
（日本語通訳）

家庭生活のパートナー

（グループセミナーでの話題）　　矢田部和子

プログラムの１つであるセミナーは、８グループに分かれていました。私達夫婦は、「セミナー：家族生活のパートナー」のパネラー役の一組として参加しました。

英語が出来ない私は、傍らに控えてくださっているボランティア通訳の方を頼りに、必死で耳を傾けました。通訳によって私がそれらの発言を理解した時は、話題は既に次に進んでいるという具合でしたが、「家族」と言う最小の社会組織にも、世界の人々がそれぞれの困難や問題意識を抱いていることがわかりました。

ルーマニアの夫人は、夫は幼児洗礼を受けているが信仰生活をしていない。両親の間で子供が何が真実か判らなくなるのではないかと心配だと。また、つい最近父親になったばかりのロシアの若い軍人は、信仰を持つ人になるにはどのように育てたら良いでしょうか。放任は良くないが、さりとて強制は民主的でないと思うし・・・。そしてアメリカの父親は、子供が学校へ行くようになって友達の影響で悪いことも覚えるようになる、どうしたら良いのか・・・。

パネラーや参加者たちは、助言をします。自分一人で悩まず牧師さんに、教会の仲間に、問題を打ち明けて祈ってもらいましょう。信仰によ

る子育ての手引書はありますよ。あなたのお国ではまだ無いかもしれないから英語の本で良かったら送りましょう。台湾の退役軍人は、アメリカのお父さんとその娘さんのために私は祈り続けましょうと言いました。等々、子育ての悩みは万国共通のもので、世界の同信の兄弟姉妹によって励まされ、リーダーからみ言を示されて力付けられます。

単身赴任の問題も出ました。何ヵ月も連続して海中生活をし電話もできない潜水艦乗組員の家族や湾岸戦争参加者の家族等は深刻です。日頃から教会と連絡を取り合い家庭の事情を理解してもらっておくことは、突然の命令を受けても教会の方々の祈りと励ましに支えられることが大きい、また、長期不在であった夫や父親が帰って来る時にも、このような配慮が大切であるとの発言。

ちょうど、この大会参加のため日本を出発する直前のテレビは、ゴマへ行かれる自衛隊員と見送りのご家族を放映していました。日本の教会が自衛隊を理解してほしいと切に思ったことです。

世界大会の恵みに思う

石川信隆

『その奥義とは、福音により、キリストイエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。(エペソ3:6)』

今回ヴァージニアで開催されたＡＭＣＦ世界大会のテーマは『Partners in the Gospel』で、上記のみ言葉から、ともに福音にあずかった者として、さらに福音を広めていくための修養会でした。世界の約100ケ国から約1000名以上のMilitary Christian達が同じ家屋の下で、共に賛美し、共に聖書のみ言葉を学び、共に祈る場を与えられたことは、それこそ主の大いなる恵みでした。お互いの軍人達が敵同志として血と血を争うのでなく、お互いにキリストの兵士として、ロシアの軍人もポーランドの軍人も、南アフリカの軍人も平和のために祈り合う姿はとても崇高なものでした。特に、今回の世界大会を主催されたACCTS(Association of Christian Conference Teaching and Services)の方々は、空港の出迎えから、受付、通訳、ホテルから会場までの送迎、食事、自由時間の観光案内等、あらゆるサービスが行き届いておりました。 とりわけ当地の日本人ガイドとしてお世話下さった園ミューバさんには、ピューリタンが最初に米国に上陸したゆかりの地やマッカーサー記念館など案内して頂き、心から感謝申し上げる次第です。いよいよ1995年AMCFアジア大会をコルネリオ会が主催しますが、祈りを以て最善の準備をしていきたいと願われました。

多彩な賜物

今市宗雄

今回の世界大会への参加は、主の造られた自然と人の多彩さに終始包まれた楽しい旅であった。

数多くの入江に緑なすノーフォーク地方を見下ろしながら空港に降り立つと間もなく、現地スタッフが私達の名前入りプラカードを掲げロビーに親しく出迎えてくれた。

初日は若いチャプレン宅にホームステイし、13 時間の時差ボケの目をこすりながら談笑した。翌日は主人のドライブで東海岸沿いに南下し、紅葉間近いヴアージニアの秋を満喫した。イギリス人が米大陸への一歩をこの地に選んだ理由がよく窺える。

早速夕刻から計画に従い各行事が進行する。

この間強く思い知らされた事は、会長を初め大会運営責任者の恵みの豊かさについてである。主から与えられた賜物の素晴らしさを目の辺りに見せて頂いた。主の教会を構成する中枢の働き人とはこれ等の人々なのだ、と目からウロコの様なものが落ちた思いをした。本当に世界は広くかつ頼もしい。井の中の蛙である私など謙遜にならざるを得ない。

後半の2日間通訳の奉仕に当たられた1人に園 Roseさんがいらした。彼の淑女は京都を離れ米国で40年、幾多の試練を経て今日の希望と喜びを与えられているのであろう。『患難は忍耐を生み、忍耐は練られた品性を生み、練られた品性は希望を生み、この希望は消えることが有りません。』との御言葉の証し人であった。今でも楽しい会話と美しい背景が目に浮かんで来る。ハレルヤ!

ニューヨークで一夜を過ごし、雑踏の池袋駅から出迎えの電話を自宅にした。その際旅行用バックの上に置いたショルダーバッグをコンクリートの床に落とされ、彼女から頂いた皿を明らかに割られた。『割れ物が壊れるじゃありませんか、注意して下さい。』と無頓着そうな中年婦人に声を高める。帰宅後この一週間でイヤな思いをしたのはこの件だけであったと家内に話すと、日く『未だ未だ貴方は愛が足りませんね。』とたしなめられた。全く身を低くせざるを得ない導きの旅であった。

集会の合間に

今井倫子

『福音にあずかるパートナー』というテーマで始められたこの度の世界大会は、世界中のあらゆる人種・言語・習慣の異なる国の軍人達がイエスキリストを主と仰ぐという一点で共通した1000人余の偉大なイベントで大変祝福の多いものでした。アメリカの人達の周到な準備によって、万端行き届いた愛の奉仕で終始され、その見事さは流石と感じ入りました。特に英語の出来ない私達にとって、日本語通訳をして頂いた事は、参加の意味が倍増の思いで

大きい喜びでした。 又集会の合間をみて大会三日目の午後、通訳者のお一人ローズさんのご好意で、今市さん矢田部夫人とご一緒にウイリアムスバーグへドライブすることが出来ました。ハイウェーが縦横に通っており、周囲の林は恵まれた大地に、真っすぐに伸びた大樹が茂り、又入江の沿岸には古城を思わせる施設が目をひき、開国以来200年余たちますがイギリス人が始めて入国した場所だけに、その歴史を感じられました。 間もなく街全体が独立戦争の数年前から戦時中の時代まで、そのまま復元したと言われるウイリアムスバーグ市に到着しました。 限られた時間を有効に過ごすため、まず概要の映画を見ることにしました。現存の修復された古い建物を背景に撮影され服装も当時の優雅なものでした。独立の指導者達の高い見識、困難を乗り越えた情熱、そして勇気ある行動が今日のアメリカの土台を築いたと、偉大な人達の業績を垣間見た思いがしました。 ゆったりとした美しい街並は、植民地時代そのままに各政庁・議事堂・裁判所・大学・教会そしてシンプルな邸宅・庭園等、それらが大変調和良く保存再現されていて、今も使われており、サミット会議の場所ともなったというので成程とうなづけました。昭和天皇がご訪問の際立ち寄られたという店には、美しい銀食器・錫細工の装飾品や調度品のコレクションが有りました。心せわしい日本とのお国柄のちがいでしょうか、観光に訪づれたアメリカの人達は皆のんびりと三々五々散策、午後の時間を楽しんでいる様に見えました。更に生活様式等くわしくうかがえる当時の商工業の展示実演公開の館を巡る馬車ツアーもあると聞きましたが時間が無く心を残しつつ帰途につきました。ちょうど秋の紅葉がはじまり、さらさらと何とも心地よい風情が広がっており、遥か200年の昔もかくやと偲ばれ実り多い楽しい数時間を感謝致しました。

ワシントンＤＣにて

今井健次

国際大会終了後ワシントンＤＣに三日滞在して市内を見物した。空港に降り立ってタクシーを拾うまでは良かったが、似たような名のホテルに乗りつけてしまって、も一度探し直すという始末、お上りさんよろしく旅が始まった。次の朝はホワイトハウスを見学しようというので８時ごろに行ったら既に長い列が出来ていて、その最後列についたら大体１０時ごろ入れるだろうと聞いたので並ぶ事にした。列の人達は老若男女子供達が色とりどりの普段着の服装で出たり入ったり、屋台で食べ物を買って来たりするが列は余り崩さない。外の木立では高い木を切り倒す作業をやっている人達がいる。十数メートルの高さのクレーン車のゴンドラの上から、動力鋸で枝を切ってはロープで下へ釣り降ろす。これを繰返しながら段々下まで切ってくる訳だが、この作業を見ていると退屈しない。間欠的に聞こえる動力鋸の響きが回りの

静けさに反響して心地よい、こんな所にこんな環境があったかと思って、回りの米人にも親しみを覚えた。この木が殆んど根本まで切り倒されたころやっと列が動き出した。見学は約一時間の予定で、ホワイトハウスの裏口から簡単な持物検査の後入場した。一階の各部屋が解放されている。大きな催し物の部屋や食堂、接待用の部屋等、中世を思わせるような内装で、大統領夫人の趣向で模様替えをすることも有るらしい。全部見せてくれるが、見学者もおとなしいもので、禁止事項を犯す者はいない。これがアメリカの一般庶民感覚かと好ましく感じた。二階以上は大統領の居住区や執務室で、側近達も執務中と思えば何と無く現実感がある。これが自由民主主義というものかと感心した。

次の日にはペンタゴンを見学することが出来た。ここは米国の国防総省で陸海空三軍・海兵隊・沿岸警備隊の五軍の参謀本部などがある。防諜等警戒は厳重に違いないのだが、見学は割合自由で毎時間受付け、30人位の見学者に一人の若い士官がついて案内してくれる。 六階建の建物の一階から四階までを見学路に従って説明しながら案内する。説明する士官は常に見学者の方を向いて後退しながら説明するのでちょっと異様だったが、監視の役もしているのだろうと、その執務態度に感心した。ＯＯ参謀長執務室などと表記のある部屋の戸が開いたままになっておったり、執務中の人の背が見えたりという状態もあって、ここでも必要以上の警戒が無いのには、さすが民主主義の国であることを思わせられた。　その後ペンタゴンに勤務している某日系陸軍大佐に案内して頂いてベトナム戦没者慰霊碑を見学した。これは市の中心部にあるが、道路から見えない様に場所を少し掘り下げてあるので、外界とは離れて静かな場所になっている。そこに１５０メートル位の長さの黒みかげ石の記念碑があり、それにベトナム戦争で犠牲になった５万人余の人の名前が、戦死年月日の順にアルハベット順に刻まれている。そしてその名前の場所が分かる様になっている。幾人かの人がそれぞれの所で花を飾り蝋燭をたてながら祈っている姿は印象的であった。世界平和は特に我国の願いであるが、案内して下さった陸軍大佐も今回の世界大会に参加し、かつロシヤの海軍中佐のホームステーを引き受けているので忙しく、これから又彼に会いに行くという事であった。そのロシヤ軍人は元潜水艦の艦長で、最近まで原子力潜水艦で大西洋を遊泳していて、仮想目標はNorfolk海軍基地であったと言う。それは今回の世界大会が開かれた地域であった事を思えば、その両者が現在は共にクリスチャンとして主にある交わりをしているという事で、新たに平和の重要さを示された気がした。

コルネリオ会広報室（JOCU）
東京都東村山市富士見町2－12－34
Tel　0423－93－6902
郵便振替　東京　3－87577
（発行責任者　今井健次）